

### 1. はじめに

グロスは通常、対象言語を形態素（や語）ごとに切り分け、内容的要素であれば自然言語による逐語訳を、機能的要素であれば略号（文法ラベル）を付すという仕方で作成される（Lehmann 2004, Leipzig Glossing Rules）。本発表の目的は後者に用いられる文法ラベルの役割を検討することを通じて、言語知識に含まれる普遍性に認知言語学的な観点から迫ることである。

### 2. 文法ラベルは何を表すのか

まず問題になるのが、文法ラベルが表すものが個別言語を記述するための固有のカテゴリー（descriptive category）として想定されているのか、通言語的に適用可能な対照概念（comparative concept）として想定されているのか不明だという点である（cf. Haspelmath 2010, 2016, 2018）。

言語類型論の実践には、対照すべき言語現象を各言語で同定することが決定的に重要になるが（Evans 2020, Stassen 2010）、一般に、個別言語カテゴリーを言語内的な基準で精緻に記述することと、通言語的な対照が可能な形で基準となる概念（対照概念）を設定することには緊張関係があると考えられている。認知言語学的研究の多くが基礎を置く、構文文法と使用基盤モデルの観点からもこの帰結が導かれる。このモデルでは言語知識の基本単位は形式と意味の結びつきとしての構文であり、文法カテゴリーは複合的な構文における役割によって規定される。個別言語の構文はその言語固有の意味と形式の結びつきを持ち、使用を通じて習得される。そして、文法カテゴリーはそうした個別言語固有の構文によって規定される、言語固有の（さらに言えば構文固有の）ものである（cf. Croft 2001, Taylor 2012）。

しかしながら、言語研究の実践において、分析者が個別言語のカテゴリーと対照概念のいずれの意味で文法ラベルを用いているのか明示されることは極めて稀である。Haspelmath（2016）は、個別言語カテゴリーと対照概念とを区別することで、グロス付けにも2通りの方法があることが理解されると主張している。たとえば、個別言語の観点からはAOR（アオリスト）のグロスが付されるカテゴリーは、通言語的研究ではPSTという対照概念のグロスにして提示したほうが分かりやすいかもしれない。この主張の背後には、従来のグロス付けでは個別言語のカテゴリーと対照概念の区別がはっきりと意識されていないという直観があるだろう。

さらに、仮にいずれかの立場が表明されていたとしても、その文法ラベルが表すカテゴリーの基準が示されることは少ない。つまり、ある機能的要素に対して何らかのグロス、たとえばERGが振られていたとしても、そこから分かるのは分析者が当の要素を“ergative”であると見なしているということまでであって、“ergative”をどのような基準で用いているかは分からないのである。このことは、特に論文の主題となっていない文法カテゴリーについて言えるだろう。Widmer & Zemp（2017）は、チベット・ビルマ諸語における egophoricity 標識の成立過程を扱った論文であり、(1) はそこで引用されている Shigatse Tibetan の例である。

(1) *kʰə̀ ɲa pʰə̀pā piɛ sa*  
3SG.ERG 1SG Tibetan COP.ALLO say.PFV

‘S/he said (that) I am Tibetan.’ (Haller & Haller 2007: 226)

(Widmer & Zemp 2017: 57)

ここで *piɛ* に付されているグロス ALLO は “allophoric” の略である。“allophoric” はこの研究の主題である egophoricity の値の一つであり、複数のチベット・ビルマ諸語に適用可能な形で論文中で明示的に定義されている。いっぽう *kʰə̀* に付されているグロス ERG は、“ergative” の略であることが注記されるのみで、どのようなカテゴリーを表しているかが論文中で明らかにされることはない。

### 3. 非明示的の文法ラベルは研究を妨げない

このように、多くの研究における文法ラベルには、①個別言語のカテゴリーか対照概念か明確でない、②定義が明示されていない、という問題が潜んでいる。それにもかかわらず、言語研究は大過なく進展しているように見える。たとえば、(2) は Spronck & Nikitina (2019) が引用する Widmer & Zemp (2017) の例で、(1) と同じものである (グロス・意識と出典は Spronck らのもの)。

(2) *kʰə̀ ɲa pʰə̀pā piɛ sa*  
3sg.ERG 1sg Tibetan COP.ALLO say.PFV

‘S/he said that I am Tibetan.’ (Haller & Haller (2007), cited from Widmer & Zemp (2017: 57))

(Spronck & Nikitina 2019: 137)

彼らは、Shigatse Tibetan の話法構文の伝達節内のコピュラが、主語である一人称代名詞と一致していないことを示すためにこの例を挙げている。Spronck らは一次資料である Haller & Haller (2007) ではなく、Widmer & Zemp (2017) を直接の出典としている。Haller & Haller (2007) は未発表原稿なので、Spronck らは Widmer & Zemp (2017) を引かざるを得なかったのだろう。

この例の ERG というラベルに注目してみよう。多くの読者は、この例文の *kʰə̀* という形式が三人称単数の対象を指す名詞的要素で、動詞的要素 *sa* の意味する発言行為の主体を表すということを容易に理解するだろう (少なくともそれが発表者の理解である)。そして、*kʰə̀* がこの例文において発言行為の主体を表すという理解をもたらす要因の一つとして、そこに付された ERG というグロスがあると思われる。しかし、個別言語の文法カテゴリーは言語固有であり、通言語的な対照概念とは一致しないという主張を額面通りに受け止めるならば、この「能格」が何を指しているか、読者は確信を持ってはいないだろう。Widmer らと同じく、この ERG がどのようなカテゴリーを表すかを Spronck らも明示しておらず、これが Leipzig Glossing Rules に記載されている (“ergative” 「能格」) の略号であることだけを注記しているのである。この「能格」は Shigatse Tibetan の格カテゴリーの一つだろうか、それとも何らかの対照概念に合致するということを表しているのだろうか。前者であれば、グロスを必要とする非専門家にはそれがどのようなカテゴリーか分かりようがない。後者であっても、その対照概念がどのように定義されているのかは論文中では明らかにされていない。にもかかわらず、現実にはこのグロスの解釈に難渋する読者は多くないだろう。定義の与えられていないグロスを含む例文を Widmer & Zemp (2017) から引用した Spronck らの論旨にも、それによって特段の問題が生じているとは思われない。

#### 4. なぜ問題は回避されるのか

文法ラベルの非明示性が例文における各要素の働きに対する理解を妨げず、研究の進展の障害とならないというこの事態の背景には何があるのだろうか。以下では、これが文法カテゴリーに関する前理論的な素朴知識の存在、ひいては、文法カテゴリーのプロトタイプやスキーマによる規定の有効性 (cf. Croft 2001: Ch. 2, Langacker 2008) の強いサポートとなると論じる。

問題が回避される理由の一つとして、まずは *portable term* (Beck 2016) の存在が挙げられる。*Portable term* は、個別言語カテゴリーと対照概念とで同じ名称が使われており、しかもその内実がほとんど同じであるというものである。たとえば、Haspelmath (2018) は人称代名詞や未来時制を例として挙げている。彼によれば、イタリア語の〈未来時制〉とスワヒリ語の〈未来時制〉の内実はほぼ同じであり、対照概念の未来時制の事例と考えることさえできなくはない。グロスで用いられている文法ラベルが *portable term* であれば、個別言語カテゴリーか対照概念かという区別は明示される必要がなくなる。その言語の専門家でなくても、問題となっている文法ラベルが一般的に表す対照概念がどのようなものかを理解していればよい。

しかし、個別言語カテゴリーと対照概念が同じ名称であっても、その内実には差異が見られるという場合もある。そうしたケースでも、記述言語学者が (暗黙のうちに) 従っている命名規則の存在によって問題は回避される。Croft (2016) が指摘するように、個別言語カテゴリーはしばしば対照概念の名称で呼ばれる。それは以下のような理由による。多くの対照概念を定義する意味機能は、成功した通言語的な一般化に関与するものである。そうした一般化からは、個々の言語において、どのような意味機能が言語形式を持ちやすいか、どのような意味機能の区別が言語形式の区別に反映されやすいか、どのような意味機能がどのような言語形式で表現される傾向があるか、といった予測が導かれる。したがって、ある個別言語カテゴリーに、それと共通点を持つ対照概念の名前を付けることによって、そのカテゴリーが当該言語の体系でどう位置づけられるか、どのような文法的振る舞いをするかを探求する指針が得られる (cf. Epps 2011, Himmelmann 2022)。

対照概念と個別言語カテゴリーにあるどのような関係からこうした予測が導かれるのだろうか。Croft (2016) によれば、こうした語類や構文の命名に用いられる対照概念の意味機能は、その定義に関わる構文の類型論的な「プロトタイプ」である (Lander & Arkadiev 2016 も参照)。類型論のプロトタイプとは、類型論的に無標な値のクラスターであり、類型論の有標性は、トークン頻度や形態統語論的振る舞い (structural coding と behavioral potential) によって規定される。無標な値と有標な値、プロトタイプと周辺例の間に見られる形態統語論的な非対称性は、頻度の差や、その頻度の差を引き起こす認知的・文化的際立ちの差によって説明される (cf. Croft 2003: Ch.4, Ch. 6)。Croft (2001: 103) は、こうした際立ちの高い概念は言語普遍的に文法カテゴリーの (言語使用者にとっての) プロトタイプとなるが、そこからどの方向にどの程度拡張していくかは言語ごとに異なるという仮説を提案している。つまり、個別言語カテゴリーは類型論のプロトタイプと見なせる概念を中心として形成されるので、上記のような予測が導かれるのである。

文法ラベルの問題に戻ろう。上述した Croft の見通しが正しければ、個別言語カテゴリーと対照概念が同一の名称を持つ際に、その内実がほぼ同じであろうとなかろうと (*portable term* であってもそうでなくても)、対照概念をプロトタイプとしてそのカテゴリーを理解できるということになる。たとえば、対照概念としての “ergative” が「(ある種のアラインメントを示す格組織における) 典型的な他動詞構

文における動作主項」のようなものであることを踏まえれば、ERG のグロスを付された形式をそうした動作主項をプロトタイプとしたカテゴリーとして解釈できるということになる。

問題の形式がそうしたカテゴリーのプロトタイプである場合の理解は簡単である。たとえば、グロス ERG が《殺す》という意味の動詞の項の語尾に付されているとしよう。《殺す》は典型的な他動的事象であるから、ERG が付された名詞がその動作主であると問題なく解釈できる。いっぽう、(1) や (2) のように典型的な他動詞でない動詞の項に ERG が付されている場合、理解のプロセスは少し複雑になる。発言者は典型的な他動的事象における動作主項（意図的に他者に働きかけてそれに変化を引き起こす主体ではないため、この“ergative”はそのプロトタイプから何らかの形で拡張させて捉える必要がある。

このことから、文法ラベルの理解には、言語普遍的なプロトタイプのみならず、言語普遍的なスキーマが用いられていると考えられる。Langacker の認知文法では、名詞・動詞・主語・目的語・所有など、文法にとって重要であるカテゴリーは、Croft が主張するように何らかの際立ちを持つ概念アーキタイプをプロトタイプとして持つだけでなく、全ての成員に当てはまる意味によるスキーマ的な規定が可能であると考えている (cf. Langacker 2008)。たとえば、主語であれば、《動作主と被動者の間に成立する動的な事象（典型的な他動的事象）を、動作主を注意の第一焦点（トラジェクター）として捉えた際の、その動作主》がプロトタイプであり、スキーマは《事象における注意の第一焦点》である (Ch. 11, *ibid.*)。さて、仮にこのようなスキーマを読者が持たなければ、プロトタイプを拡張する際にそのどの特徴に注目するかは任意になる。たとえば (3) のバスク語の例における ERG は、典型的な他動的事象の動作主を表すとは考えられないので、そこからの拡張が必要になる。読者は、この文における *tomateak* の役割と、類型論的プロトタイプの《典型的な動作主》を比較して、どのような拡張であるかを探索するのだろうか（「意図性？ 違う。働きかけ性？ 違う……」）。もしそうであれば推論の成功率は落ちると考えられる。そうではなく、《事象における注意の第一焦点》というスキーマによって両者をカテゴリー化するのではないだろうか。スキーマはプロトタイプのどの面に注目すればよいかを教えてくれるのである。

### (3) *Tomate=a-k jatorri=a Hego Amerika du.*

トマト=SG-ERG 原産地=SG 南 アメリカ PRS.A3S.持つ.E3S

「トマトは南米が原産地だ」

こうした言語間の対照を可能にする普遍的な能力の存在は、言語コミュニケーションのあり方からも予想される。聞き手は、話し手の産出する音声・動作などを、自らの言語知識によって言語表現としてカテゴリー化することで理解する。つまり、言語使用には、個人語レベルでの言語表現の比較対照が常に含まれる。ほとんどの言語使用者が多言語・（スタイルなどを含めた）複数変種の産出・理解の能力を持つことを踏まえると、個人語より上のレベルでも異なる体系間の比較が求められることになる。上述したプロトタイプやスキーマは、言語使用におけるこうした比較対照や、言語学者が言語や変種を設定する際の対照にも関わっていると考えられる (cf. Gil 2016)。

## 5. 前理論的概念は研究に不可欠である

Haspelmath (2010, 2016, 2018) は、個別言語を記述するための固有のカテゴリー (descriptive category) は各言語に固有の社会範疇 (social category) であり、自然種 (natural kind) ではないため、ある言語の

カテゴリーについての知見を、他の言語のカテゴリーに当てはめることはできないと主張する。その根拠は、仮に個別言語のカテゴリーが自然種であるならば、そのカテゴリーはどの言語においても同様の振舞いを示すはずであるが、それは事実と反するというものである。このような立場からすれば、プロトタイプやスキーマを用いた上述の推論は科学的探究の手段としては許されないものとなるだろう。Spike (2020) は、この点について科学哲学における議論を援用し、化学や生物学においても自然種とは実践的な推論を導くためのものであり、Haspelmath が要求するような厳密な同一性は求められていないと指摘している。たとえば、自然種の代表格である「水」ですら、複数の同位体や不純物の存在など多くのバリエーションを含むものであり、それらの条件を統制し、特定の同位体かつ不純物を全く含まない H<sub>2</sub>O のみを自然種としての水であると規定することは、水に関する知見の多くを失わせることにしかならない。

本節冒頭で挙げた問いは、文法ラベルの非明示性が例文における各要素の働きに対する理解を妨げず、研究の進展の障害とならないのはなぜかというものであった。以下では、生物学における「種問題」をメタ的に論じた網谷 (2020) を参照して、文法ラベルの非明示性が有する積極的価値を検討する。生物学の基本概念の一つである「種」には、「形態学的種概念」、「生物学的種概念」、「系統学的種概念」など様々な規定が存在し、いまだ合意には至っていない。つまり、同じ「種」という用語を用いていても、立脚する理論によりその内包は様々に異なりうるということである。このような状況では、ある生物群が種かどうかを理論間で論じることは実質的に不可能であることが予測される。表面的には「x は種である」か「x は種ではない」という両陣営に理解可能な命題をめぐる議論であったとしても、その内実は、「x は形態学的種である」か「x は生物学的種である」というものでありうる。それぞれの種概念は理論ごとに設定された様々な概念に依存して規定されるものであるため、一方の陣営からもう一方の陣営の主張を理解することは極めて困難になってしまうというわけである。

網谷 (2020) によれば、生物学者達は「よい種」というインフォーマルな概念を用いて種に関する議論を行うことで、上述の問題を回避している。「よい種」とはごく簡単に言えば、種のプロトタイプである。これは前理論的に把握される概念であるため、異なる理論を採用している論者同士が共通して用いることができる。科学的研究の進歩は理論間の対話を不可避的に含み、そのためにはこのような概念が不可欠なのである。

ここから、文法ラベルの取り扱いについても重要な示唆が得られる。言語研究においても生物学における種問題のように、文法カテゴリーの内包的規定をめぐる議論は（メタ的なものを含め）多数行われている。理論間での議論が可能であるのは、私たちがそれぞれのカテゴリーのプロトタイプやスキーマを前理論的に把握しているためである。仮にそのような把握に頼ることができなければ、理論を共有しない論者がそもそも何を主張しているのか、理解する手立てがなくなってしまうだろう。Haspelmath の主張に反して、言語研究においても明示的な定義によらない概念を用いた主張は極めて重要な役割を担っているのである。もちろん、理論内で概念の明確な定義を追求することには重要な意義がある。しかし、あらゆる場面でそのような定義の前景化を求めることは、研究の継続性を損なうことにしかならないと言えよう。

## 6. おわりに

本発表では、グロスにおける文法ラベルがしばしば対照概念と個別言語カテゴリーを区別せず、明示的

に規定されないこと、それにもかかわらず、例文の理解や言語研究に大きな問題が生じていないことに注目し、その理由を探った。対照概念と個別言語カテゴリーの別が明らかでなくてもよいのは、対照概念と個別言語カテゴリーで同一の名称が用いられているからである。対照概念による個別言語カテゴリーの命名は無秩序に行われているのではなく、個別言語カテゴリーのプロトタイプに基づいている。このプロトタイプは言語普遍的であり、それを通じて我々は同一名称の個々の個別言語カテゴリーの内実が異なる場合にも、その普遍性と多様性を推測することができる。また、こうしたカテゴリーの少なくとも一部には言語普遍的なスキーマが存在し、プロトタイプのどの面に注目してカテゴリーを拡張すべきかを、前理論的な形で導いている。こうしたプロトタイプやスキーマによる明示的な定義によらない把握が、文法カテゴリーの規定をめぐる議論を可能にしている。

**略号一覧** A3S: 絶対格項が三人称単数である, ALLO: allophoric, E3S: 能格項が三人称単数である

**参考文献** 網谷祐一 (2020) 『種を語ること, 定義すること 種問題の科学哲学』勁草書房 / **Beck**, David (2016) Some language-particular terms are comparative concepts. *Linguistic Typology* 20: 395–402. / **Croft**, William (2001) *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: OUP. / **Croft**, William (2003) *Typology and universals*. (Second edition). Cambridge: CUP. / **Croft**, William (2016) Comparative concepts and language-specific categories: Theory and practice. *Linguistic Typology* 20: 377–393. / **Epps**, Patience (2011) Linguistic typology and language documentation. In: Song, Jae Jung (ed.) *The Oxford handbook of linguistic typology*, 634–649. Oxford: OUP. / **Evans**, Nicholas (2020) Introduction: Why the comparability problem is central in typology. *Linguistic Typology* 24: 417–425. / **Gil**, David (2016) Describing languoids: When incommensurability meets the language-dialect continuum. *Linguistic Typology* 20: 439–462. / **Haller**, Felix & Haller, Chungda (2007) Einführung in das moderne Zentraltibetische. Auf Basis des Dialektes von Shigatse / westliches Zentraltibet (Tsang). [Manuscript] / **Haspelmath**, Martin (2010) Comparative concepts and descriptive categories in cross-linguistic studies. *Language* 86: 663–687. / **Haspelmath**, Martin (2016) The challenge of making language description and comparison mutually beneficial. *Linguistic Typology* 20: 299–303. / **Haspelmath**, Martin (2018) How comparative concepts and descriptive linguistic categories are different. *Linguistic Typology*. In: van Olmen, Daniël et al. (eds.) *Aspects of linguistic variation*, 83–113. Berlin: De Gruyter Mouton. / **Langacker**, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford University Press. / **Lander**, Yury & Arkadiev, Peter (2016) On the right of being a comparative concept. *Linguistic Typology* 20: 403–416. / **Lehmann**, Christian (2004) Interlinear morphemic glossing. In: Booij, Geert et al. (eds.) *Morphology: An international handbook on inflection and word-formation*, 1834–1857. Berlin: Walter de Gruyter. / **Leipzig Glossing Rules** = Bickel, Balthasar & Comrie, Bernard & Haspelmath, Martin (2015) *Leipzig Glossing Rules: Conventions for interlinear morpheme-by-morpheme glosses*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. / **Stassen**, Leon (2010) The problem of cross-linguistic identification. In: Song, Jae Jung (ed.) *The Oxford handbook of linguistic typology*, Oxford: Oxford University Press. / **Spike**, Matthew (2020) Fifty shades of grue: Indeterminate categories and induction in and out of the language sciences. *Linguistic Typology* 24: 465–488. / **Spronck**, Stef & Nikitina, Tatiana (2019) Reported speech forms a dedicated syntactic domain. *Linguistic Typology* 23: 119–159. / **Widmer**, Manuel & Zemp, Marius (2017) The epistemization of person markers in reported speech. *Studies in Language* 41: 33–75.